

琉球における空間認識に関する言語文化論 —「青」の世界と「イノー」の思考—

橋尾直和¹⁾

(2016年9月29日受付, 2017年1月10日受理)

An Essay on the Linguistic Culture of Spatial Perception in the Ryukyu Region:
Thoughts on “Inō” and the World of “Blue”

Naokazu HASHIO¹⁾

(Received : September 29, 2016, Accepted : January 10, 2017)

要 旨

仲松弥秀氏は、古代沖縄の色彩概念は、奄美諸島も同様「青の世界」は明るい世界に通ずる淡い世界で、『古事記』の黄の世界と類似しているとした。「おう」の付く地名・御嶽名・神名が見出されることから、古代沖縄人が「青の世界」を想定していたとし、奥武島は「青の島」であり、死後の世界の島と考えた。谷川健一氏は、奥武の島は人が死ぬと死体を運んで葬った地先の小島であり、風葬墓に葬られた死者が黄色い世界に住むということから、「青の島」を他界の色として捉えた。崎山理氏は、青は「中空」を意味する言葉と推定し、マライ・ポリネシア祖語 *awan は、奈良朝の上代日本語では、アワ「淡」、アヲ「青」となった。近江の語源アハ－うみ「淡海、相海」は、アワ－うみが本来の語源であり、中空の色を反映している様とした。筆者は、琉球弧で礁池を表す「イノー」の語源は、逆語序である「海淡」とし、「あの世とこの世との間」を表す「境域」「中間の世界」と解釈した。

キーワード：琉球、青、イノー、ニライ・カナイ、空間認識

Abstract

Yashu Nakamatsu claimed the perception of colors in ancient Okinawa is similar to that of the Amami Islands, where the “world of blue” is considered to be faint and leading to a bright place, similar to the world of yellow in the “Kojiki.” Since the sound ō, which is related to the Modern Japanese ao “blue,” can be found in place names and in the names of utaki shrines and indigenous gods, Nakamatsu thought people in ancient Okinawa envisioned a “world of blue,” with Ōjima as aojima, the “island of blue” —the island of the afterlife. Kenichi Tanikawa understood the “island of blue” as the color of the afterworld because Ōjima, a small, nearby island, was where people used to bring and bury dead bodies; those given open-air burials were considered to live in the world of yellow. Osamu Sakiyama posited that ao, the word for blue, means “empty sky” or “hollow,” and that the Proto-Malayo-Polynesian word *awan, became the words awa (“faint” or “pale,” written 淡) and ao (“blue,” written 青) in Nara-era Old Japanese. Aha-umi (written 淡海 or 相海, “faint sea”) —

1) 高知県立大学文化学部 教授 Faculty of Cultural Studies, University of Kochi, Professor

the origin of the place name Ōmi—was originally awa-umi, which is supposed to indicate the color of hollowness, or the empty sky. This essay hypothesizes that the origin of the word inō, which means “shallow lagoon or moat” in the Ryukyu region, is umi-awa (海淡), that is, the word in reverse. The essay posits that the word means “border” or the “the middle world,” referring to a location “between the present world and the next world.”

Key words: Ryukyu, blue, inō, nirai-kanai, spatial perception

1. はじめに

琉球の人々の空間認識と他界観を考える上で重要なキーワードは、「青」である。

仲松弥秀氏は、文化地理学の立場から、古代沖縄の色彩概念は奄美諸島も同様で、「青の世界」とは、明るい世界に通ずる淡い世界で、『古事記』の黄の世界と類似しているとした。「おう」の付く地名・御嶽名・神名が見出されることから、古代沖縄人が「青の世界」を想定していたとし、奥武島は「青の島」であり、死後の世界の島と考えた。

この説を受けて、谷川健一氏は、民俗学の立場から、奥武の島は人が死ぬと死体を運んで葬った地先の小島であり、風葬墓に葬られた死者が黄色い世界に住むということから、奥武島を「青の島」と解釈し、「青」を他界の色として捉えた⁽¹⁾。

言語学者である崎山理氏は、比較言語学の立場から、白は「光」、黒は「闇」、赤は「昇り」、青は「中空」を意味する言葉だったと推定した。このうち、「中空」を指す語源のマライ・ポリネシア祖語 *awan は、奈良朝の上代日本語では、アワ「淡」、アヲ「青」となった。近江の語源アハーうみ「淡海、相海」は、アワーうみが本来の語源であり、中空の色を反映している様を表すとした。

すなわち、文化地理学・民俗学の視点では、琉球に点在する奥武島は「青の島」であり、その「青」とは、古代沖縄人が想定していた「青の世界」とつながり、世界とは死語の世界であり、「青」は他界につながる語である、と説いている。一方、比較言語学の視点では、「青」は「淡」とつながり、「中空」を指す語源のマライ・ポリネシア祖語 *awan とつながる、と説いている。

しかし、前者と後者とをつなぐ理論は存在しない。そこで、筆者はこの「青の世界」について考察を進め、語源未詳とされてきた、琉球弧で礁池を表す「イノー」の語源こそが、両者のつながりを紐解く存在であることを突き止めた。「イノー」とは、島と海の間、「あの世とこの世との間」を表す「境域」であり、「中間の世界」と解釈するに至った。この解釈は、「ニライ・カナイ」の他界観にもつながる。

本稿の目的は、古代沖縄人が想定していた「青の世界」と「ニライ・カナイ」の他界観が、琉球弧で礁池を表す「イノー」の語源を紐解く際の空間認識につながり、その思考こそが「イノールの思考」とも言える「中間の世界」観であることを、具体的な根拠を挙げながら明らかにすることである。

ここでは、琉球における空間認識に関して、「青の世界」と「ニライ・カナイ」の他界観を「イノールの思考」を介して、文化地理学・民俗学と比較言語学の知見を援用し、琉球語・日本語とオーストロネシア語とによる比較研究に基づいた言語文化論を展開したい。

2. 「青」の世界

まず、従来の「奥武島」の「奥武」(オー)の語源に関する諸説を挙げておく。全部で5点ある。

(1) 仲松弥秀氏の「青の世界」説(『神と村』(1990)による)

仲松氏は、「黄泉の国の`黄、なるものを考えた場合、それは`赤、でなく、うすぼんやりした明と考えられることは間違い無いことではなかろうか」と述べている。そして、「古事記時代までの日本民族は死後の世界を暗黒の世界としてではなく、現生の明るさと通じることのできる`黄、の世界としてとらえていた」と説明している。

「青の世界」は暗黒でもなければ、明るい世界でもない、明るい世界に通じる淡い世界、すなわち古事記にいう黄泉の国、黄の世界と類似の想定がなされるのだという。古代沖縄人は死後に暗黒の世界には行っていない。青の世界に行っているのである。

古代沖縄人が「青の世界」を想定していたと考えられることは、「おう」の付く地名や御嶽名、神名が相当に見出されることから推測されるのだという。「沖縄には奥武名のついた地先の小島が七つほど見出される。そのいずれも無人の小島であったところで、古代の葬所となっていたと推定されている。奥武島は、青の島なのである」と、仲松氏は考察している。

(2) 宮城真治氏の「奥武島は祓島の義」説(『古代の沖縄』(1972)による)

沖縄本島・勝連半島の北部にある伊計島(現うるま市)では、毎年8月に古式に則った「しぬぐ祭」が行われるという。宮城氏は、このときに謡われるウムイ(宗教儀式歌)から、奥武島は「^{はらいじま}祓島の義」であると考察している。ウムイの文言は、次の通りである。

ええ ^{ぬん まー}野に廻いどう
^{ぬふあ まー}野原ぬ廻いどう
 いなむさあ(稲虫)や
 かんがはな
 たとうりどう
 うえんちやあ(鼠)や
^{おお しま}奥武ぬ島んかい
 けえ とうどうりよう
 たまがばら がばら

宮城氏は、伊計島では野原廻りといって、女の新色と各戸から出る男子が東手、西手、中手の三手に別れ、ススキで鉢巻をし、手にもススキの穂先を結んだものをもって、原廻りをし、ところどころでこのウムイを謡い、害虫や鼠(うえんちやあ)の祓いをなし、海岸で手に持ったススキを投げ捨てる。このウムイの中に、「鼠は^{おう}奥武の島に飛び立てよ」とあるのは、害虫や鼠を祓って、これを封じ込める島をオオヌシマと言ったのではないかと、説明している。

しぬぐ祭りでは「野原廻り」という神事が行われる。集落の人々が薄の穂先を結んだ魔除けに用いるゲーンを手にし、祓う仕草を繰り返しながら集落を廻るのである。これは、野や畑から害虫やネズミを魔除するための神事で、このとき歌われるのが、先の「ウムイ」である。因みに、ゲーンとは「シバサシ・柴差し」とも言われ、薄と桑の小枝を束ねたものである。沖縄では、悪霊や妖怪を避けるための魔除けと

して、屋敷の四隅や、門、井戸などに立てかける慣わしがある。

宮城氏は、「ウムイ」の中にある「うえんちやあ（鼠）や 奥武ぬ島んかい けえ とうどうりよう（鼠は、おーぬしまに飛び立てよ）」という文言に注目している。つまり、害虫や鼠を払って封じ込める島が、おーぬしま（奥武島）なのだという⁽²⁾。

これらのことから、神の力により害虫や悪霊を払って、封じ込めることを「オー」といい、オーは「飜（あおる）」、「扇ぐ（あおぐ）」の意味で、奥武島は「飜島（オーグ島）」、「扇島（オーグ島）」であって、害虫や悪霊を閉じ込めた祓い島であったと考察している。

(3) 谷川健一氏の「青の島とあろう島」説（『南島文学発生論－呪謡の世界－』（1991）による）

谷川氏は、「青の島とあろう島」のなかで、仲松弥秀の青の島、奥武島説を肯定し、さらに宮城真治の「奥武島は祓の島」にも触れながら、加えて次のように論述している。

「青の島の祖霊が現生の人びとの生活をつねに見守っているということから、青の神はやがてニライ・カナイの神と混同されるにいたる。鼠を奥武島に送り返す歌と、ニライ・カナイに送り返す歌との二つがあるが、これによると奥武島とニライ・カナイが万物発祥の原郷として同一視される側面をもっていることがわかる」と記し、それを裏付けるウムイで、大宜味村喜如嘉に伝わる「諸神御送りが節」を紹介している。

えい えい あふの御神	えいえい青の御神
な一むとむとかち	各元々へ
うきいめ 御移り召しようち	御移り無さって下さい
まやぬ御神	マヤの御神
な一むとむとかち	各元々へ
うきい 御移り召しようち	御移りなさって下さい

マヤの神とは、真世の神とも呼ばれる遠来神であり、八重山の祭祀には招かれて訪ねて来るマユンガナシやアカマター・クロマターなど、遠来神の名が見える。つまり、ウムイに謡う「青の神さま」も「マヤの神さま」も、それぞれの住まいにお移り下さい、という意味なのだそう。このことから谷川氏は、青の神とマヤの神を同一神とみなしている。

谷川氏は、「青の島が第一次的な祖霊の島であるとすれば、第二次的他界がニライ・カナイであり、ニライ・カナイの神はいったん青の島（奥武島）に足を留めてから、本土に上陸するのである」と述べている。史書、『球陽』や『中山世鑑』に海神の荒神（あらがみ）が、必ず「奥」に出現すると記されているのは、このような意味をもっていると解釈している。

(4) 平良恵貴氏の「潮干潟をなす浅海はアフの海、オクのヒタ」説（『琉球の地名と神名の謎を解く』（2010）による）

琉球のノロの御神託、「ミセゼル」に、潮干潟をなす浅海を「アフ（オウ）ノウミ、オクノヒタ」と謡われているとして、伊是名島の「浜ニテノミセゼル」が紹介されている。

(略)	(略)
シラハマニ フクハマニ	白浜に、福浜に
神ウレタチ コモリタチ	神女一行は降り立ち
アフノ海 オクノヒタ	アフの海、オクのヒタ (に)
コバナカゴ マネナカゴ	クバの新芽、まーにの新芽を
ヨリヨレヤイ ツキオレヤイ	より入れ、つき入れ給い

と言うものであるが、ここでいう「アフの海、オクのヒタ」は、伊是名島と、その南側に浮かぶ屋那覇島に挟まれた海で、東西をサンゴ礁で囲まれた内海であるとしている。この海は、大潮の低潮時になると干潟になるという。

平良氏は、奥武島をとりまく海の様子を海図で調べ、すべての奥武島はサンゴ礁にかこまれ、低潮時には浅海になり、また干潟が現れることを立証している。奥武島は、この「アフの海、オクのヒタ (干潟)」の中にあることから、「アフ (オウ) の海の島、オクのヒタの島」であると結論付けている。

(5) 外間守善氏の「おもろ語の聖なる場所アフ」説 (「おもろ語あふの考察」『日本語の世界 9 沖縄の言葉』(1981) による)

『おもろさうし』にあるおもろ語「アフ」が、アフ→アウ→オーと転じた結果と見なしている。外間氏は、仲松氏の「アフは青であろう」とする想定を肯定しながらも、「あふ」の意味的機能を呪詞、神歌などの用例に則してみると、色彩としての「青」というよりも「聖なる場所」としての慣例的な使われ方が多いとし、アフタモト、シケタモト (聖なる神の坐所) という語に代表され、アフ、シケ、タキ (聖なるが場所) が同義として使われているところから、アフは「神のまします聖なる場所」または「オボツカグラに通ずる中継ぎの場所」、「聖なる」という意味の敬称語であると結論づけている。

次に、「奥武」(オー) の語源に関する諸説について、「青の世界」と関連づけて考察していく。

仲松 (1990: 140-141) では、琉球における地先の島としての「奥 (オ) 武 (ー)」は、色彩語の「青」と関連があることを指摘している。

『おもろさうし』の記述から古代沖縄の色彩概念を質してみると、赤・白・青・黒の四色しか見出せない。このことは奄美諸島も同様であったようである。赤と白は「明るさ」に通ずるが、そのうち赤は魔物にとっては怖いものであり、白は清浄に通ずる。黒は赤・即ち「明るさ」と対遮する暗黒・無・恐怖・穢れの世界を観念・想定する。

残るところの青は、青空・青葉・青海の語によっても推測されるとおり、空色・緑・淡黄・碧などの色を表している。そしてこれらの色彩は赤と黒に対して中間色となっている。したがって青の世界は暗黒でもなければ、赤・白をもって現わす明るい世界でもない。むしろそれは、明るい世界に通ずる淡い世界、古事記の黄の世界と類似の想定がなされるであろう。伊波氏は、古代沖縄人は、「来世は暗黒な所と思っていた」と述べているが、そうではなく、古代沖縄人は死後暗黒の世界には行っていない。それは「青の世界」に行っている。

仲松氏は、また、文献における「おう」名について、次のように述べている。

古代沖縄人が「青の世界」を想定していたと考えられることは、「おう」名の地名・御嶽名・神名

が相当に見出されることから推測される。

沖縄には「奥武」名のついた地先の小島が七つほど見出される。そのいずれもが無人の小島で、そこは古代の葬所となっていたと想定される島、あるいはニライ・カナイ⁽³⁾の神が来臨される島と思われてきたところである。

そのなかのひとつ、久米島の奥武島は、『おもろさうし』にあふ島とされ、そこにある御嶽の名は『琉球国由来記』にあふの御嶽となっている。また、『おもろさうし』に「あうのたけ」の語も見られる。

『琉球国由来記』には、慶良間諸島の微小島奥武小には「アフノ御嶽」の嶽名が記されている。

奥武は大とも解釈が可能であるが、『琉球国旧記』中の大は、『琉球国由来記』ではオホとなっている。このようなことから見て、奥武と大は関係のないことが判明する。

それでは奥武とは何を意味するのであろうか。

主としてカナ書の『琉球国由来記』と漢字書になっている『琉球国旧記』とを相互に照合すれば、現在の奥武すなわち『琉球国由来記』のアフ・アホは表意文字の漢字によって、その意味する語がわかるはずである。そのような見地から、『琉球国由来記』に記載されているアホ・アフ・アウなどの御嶽名・神名を旧記のそれと照合してみたのが次頁の表である。

この表からみると、『琉球国由来記』のアフ・アウ・アホが『琉球国旧記』では青と当てられ、一部のみが阿烏・阿符となっている。このことから推定すれば、久米島と慶良間の奥武がおのおのアフ・アホと記され、それが同じく青と当てられていることによって、現在奥武名のついている地名も、もともとは同じく青であったと考えられる。

表1 『琉球国由来記』記載のアホ・アフ・アウの付く御嶽・神名（仲松 1990 による）

	御 嶽 名	神 名
沖 縄 本 島	アフ四（青四） アヲ一（青一）	アフ十一（青八，阿烏一） アウ一（青一） アホ一（阿遠一）
慶良間諸島	アフ一（奥一）	
久 米 島	アフ（阿符）	
伊 江 島		アフ一（青）
伊 平 屋 島	アウ（青）	アフ五（青一，阿烏一）

（カッコは内『琉球国旧記』の漢字書。旧記には漢字当の無いものがある）

さらに、仲松（1990：145-146）では、ニライ・カナイも「青の国」とし、以下のように述べている。

大宜味村喜如嘉の海神祭神歌の「諸神を送るウムイ」に、「アウの神送やびら、マヤの神送やびら……」という句がある。そして、「アウの神送やびら」と謳うときには、海の方に向かう、つぎの「マヤの神送やびら」というところでは山（御嶽）に向かって手を合わす。

明らかにマヤは山の転倒語であることがわかる（喜如嘉ではよく転倒語が聞かれる。ウタカベ（御崇べ）がウカタベになっている）⁽⁴⁾。

それはともかくとして、このウムイの中のアウの神がニライ・カナイの神であることはまず間違いないだろう。このように、古代の沖縄人はニライ・カナイを「青の世界」と観じていたのとおなじく、

死者の往くところも「青の世界」と想念していた。

双方とも安らかなところであり、現世からはか手の届かない世界でもあるけれどしかし、かすかに現世と往来のできる世界であるということで、ひとしく「青の世界」と観じられていた。

ニライ・カナイは、万物生成豊かな世界であり、われわれの現世にそれらの福を与えてくれるという側面をもっている。

だからこそ、死者の往く「青の世界」に対しては、誰も憧憬しないが、ニライ・カナイに対しては「行ってみたい」という積極的な憧れをもつようになった。

ニライ・カナイは、ニライ・カナイの神のもとに安らかな世界をなしている。われわれの父祖もここに安住しているといわれているばかりでなく、あらゆるものの根源の世界ともなっている。いわば二つの側面をもっている世界なのである。

仲松氏は、前掲のように「沖縄には「奥武」名のついた地先の小島が七つほど見いだされる。そのいずれも無人の小島であったところであるが、またその何れも古代の葬所となっていたと推定される島、あるいはニライ・カナイの神が来臨される島と思われてきたところである」としている。つまり、奥武島は「青の島」であり、死後の世界の島と解釈している。奥武島は、ほとんどが「おうじま」と読む。南城市、名護市の屋我地島に渡るところ、久米島、慶良間諸島にもある。那覇市には奥武山がある。現在では、島と名が付いているが、橋で繋がっており、那覇の場合は、陸地の一部となっている。

谷川（1991：426）において、「奥武の島は人が死ぬと死体を運んで葬った地先の小島であり、風葬墓に葬られた死者が黄色い世界に住むということから、青の島と呼ばれたのである」と、やはり、「青の島」を他界の色として捉えている。しかし、筆者はこの「他界」というのは、原義からの派生義ではないだろうかと考える。

また、宮城（1992：88-90）によれば、「害虫や悪風を封じ込める所を「奥武島」と呼んだと思われる。神力により害虫、悪霊を払い封じ込めることを「オー」という」と解釈をしているが、先の谷川氏の解釈と同様、原義からの派生義ではないかと考える。

平良（2010）では、「すべての奥武島は、低潮時ともなれば、ほとんど干上がってしまう「しおひがた」の内に位置しているのである」と述べている。すなわち、陸地から少し離れている慶良間の奥武島も、環礁内のイノーと呼ばれる潟の海に位置しており、琉球のミセゼルでは、潮干潟にある浅海を「アフ（オウ）ノウミ、オクノヒタ」と唄った、奥武島とは「アフ（オウ）の海の島、オクのヒタの島」の意である、と結論づけている。

崎山（2012：386-388）は、「白、黒、青、赤」が、最初に色彩名称ではなかったと指摘し⁽⁵⁾、それぞれの語源について、白は「光」、黒は「闇」、青は「中空」、赤は「昇り」を意味する言葉だったと推定している。「光」と「闇」は明度に繋がる現象であり、「昇り」は動態を、「中空」は場所を指す概念である。色彩語彙における「白」「黒」「青」「赤」の4色の語源を、オーストロネシア祖語に求めるならば、次のような音変化が考えられる。

*は再構形、>は左から右への語形変化、/はバリエーション、-はあき間を表す。

(PMP= マライ・ポリネシア祖語、PWMP = 西部マライ・ポリネシア祖語、R= √)

*sinaR (PMP) / *silak (PWMP) 光 > sira 「白」 / siro 「白」 / -

*gəlap (PWMP) 「闇」 > kura 「暗」 / kuro 「黒」 / kure 「暮」

*awan (PMP) 「中空」 > awa 「淡」 / awo 「青」 / -
 *a(ŋ) kat (PMP) > aka 「赤、明」 / - / ake 「朱、開、明」

このうち、「中空」を指す語源の *awan は、奈良朝の上代日本語では、アワ「淡」、アヲ「青」となっていた。たとえば、近江の語源とされるアハ－うみ「淡海、相海」は、アワ－うみが本来の語源であったとして、「平均 40 m しかない琵琶湖の湖面は中空の色を反射して鏡のように刻々と変化する。古代人はそれを熟知していたと思われる」と述べている。つまり、近江とは、中空の色を反映していることになる。

また、アワの語源となった *awan は マレー語で「中空」だが、タガログ語で「空間」、マダガスカル語で「虹」、フィジー語で「遠く」、サモア語で「間」のように変化し、マレー語では述語にもなって、「合意できるか、まだ五里霧中」と言った場合の「五里霧中」の意味にもなっている。

なお、色彩語彙については、崎山 (2012) では、再構形の根拠は示していないが、村山 (1975 : 189) ・村山 (1978 : 108) において、村山七郎氏の下記の解釈が見られる。なお、村山氏の示す「青」の南島祖語 *awan の意味は「天空」であるが、崎山氏の示す「中空」とは少し意味がずれている。いずれにしても、色彩語彙の「白」「黒」「青」「赤」の4色の語源については、オーストロネシア諸語から再構することができ、「天体」との関連を示す点で共通していることが分かる。ここで村山氏が挙げる「南島祖語」は、オーストロネシア祖語 (AN) を指す。(* は再構形、[t] の ['] は口蓋化音、[C] は任意の子音を表す)

「白」

南島祖語 *t'ilak 「光線」(村山 1974 では「光」)

インドネシア語派

ジャワ sila? 「明るい、輝くところの、雲のない」(村山 1974 : 161 では「光線」)

メラネシア語派

フィジー zila (天体が) 「輝く」

ポリネシア語派

サモア u | ila 「電光」

日本 sira < *t'ila 「白」 < 「明るい」

「黒」

原始インドネシア語 *gəlap 「暗やみ」

インドネシア語派

マライ gəlap 「暗やみ」

日本 クロ／クラ < *gəlaC 黒／暗

「青」

南島祖語 *awan 「天空」⁽⁶⁾

インドネシア語派

トバ・バタク awan 「空」

ジャワ awan 「雲」、awan-awan 「空」

マライ awan 「空、天空」

ホーワ awana 「虹」

メラネシア語派

フィジー yawa 「(水平＝) 遠方」
 日本 アヲ awo < *awaC 「空、雲」
 「赤」
 南島祖語 *aŋkat 「上昇」
 インドネシア語派
 マライ aŋkat 「上昇」
 ホーワ akatra 「昇ること」
 日本 aka 「赤」ake 「明け」< *akai 「(夜が) 明けること」
 aga-ra < aŋka-ra 上ガラ (未然形) 「上へあがる」
 aka-ra 明カラ (未然形) 「明るくなる、赤らむ」
 *aŋka- / aka- は「(太陽の) 上昇」との関係が推定される」沖縄 ʔagari 「東」(上ガリ) 参照。

崎山氏は、近江の歴史的仮名遣いの「アハーうみ」の本来の語源は「アワーうみ」として捉えており、その意味では、「アフ・アウ・アホ」もアワからの転訛か誤記が見られるが、同じ「青」の語源をめぐった言葉だとみなしても良いことになる⁽⁷⁾。

この「青」について、谷川(1997:30)では、池間島における「青籠^{あおむぐい}」という語を、他界観と結びつけて、次のように述べている。

宮古本島の北に位置する池間島には青籠^{あおむぐい}と呼ばれる場所がある。そこは潮のさしてくる入江になっていて、入江に向かう岸壁に点々と洞穴はあいている。以前はこの洞穴に若死した子どもや、難破して海に死んだ者、あるいは伝染病で亡くなったものを葬ったといわれる。一口にキガスン(怪我死)といわれる者たちである。彼らは不慮の事故死のために、ふつうの墓に入れてもらえなかった。そしてこの入江のほとりの、岩穴に投げ込まれた。まさしく青籠^{あおむぐい}の名にふさわしい場所であった。(略)

筒井(2015:191)においても、「青」は「この世とあの世のあいだ」と捉え、次のように指摘している。

古代の文献に出てくる「青」も、だいたい色を表している。だが、そのころの青は今日のブルーとは全く、あるいはかなり違っていた。小学館の『日本国語大辞典』の「あお」の項には次のような説明が見える。「本来は、黒と白の中間の範囲を示す広い色名で、主に青、緑、藍をさし、時には、黒、白をもさした」

その感覚は現代語にも明瞭に残っていて、「青信号(実際は緑である)」「アオシシ(カモシカのこと)」「青い山脈」「顔が蒼^{あお}ざめる」などを例に挙げることができる。

これから考えて、青は原義的には何かの色を指す言葉ではなく、「どちらにも属さない、中間の位置または状態」を意味していた可能性が強いように思われる。

この推測が当たっているとすれば、アオ(古い表記ではアヲ)とは元来、「あの世とこの世とのあいだ、境、中間」を指したのではないか。そこはぼんやりと薄暗い、もしくは薄明るい世界だと意識されていたのではないか。その感じが、古代から今日までつづく色彩語としての青に反映しているのかもしれない。

田畑（1976：90）においては、奄美におけるアヲの語感について、「空間的距離・間」のみならず、「時間的距離・間」の意味があるとして、次のように述べている。

名瀬方言で、空間的・時間的な距離とか間（間隔）の意味に、アヲという語を年寄りなどは現在でもよく使っている。アヲヌ トゥーサン（距離が遠い）、アダ アヲヌ アッカナ（未だ時間的な間があるではないか）アヲヌ チキヤサ（距離が近い）、ナリ アヲ ヌキイティ シレイ（も少し間をおいてやれ）など。

すなわち、田畑氏の名瀬方言の例から、奄美におけるアヲという語の「地理的空間」から「時間」へのメタファー表現への派生が確認できる。

これらのことから、「青の世界」が、奥武という島の現実の世界とニライ・カナイという概念の世界とが渾然一体となった「あの世とこの世との間」「境域」「中間の世界」を指すことを意味しており、その境にある中間の世界を「青」という色彩語で言い表したと考えられる。

3. 「イノー」の思考

仲松（1993：31）には、徳之島の村落にある「^{インジョウ}犬門」についての、記述がある⁽⁸⁾。

^{インジョウ}犬門といわれている場所が徳之島兼久村落にある。波打際に位置している大岩穴で、穴を通してはるかな海が見え、そこを通して海を拝する聖所となっている。そして、そこから村落へ通じる神道がある。

そもそもこの犬門が海の神（ニライ・カナイの神）に向かったの拝所になっていることから考察すれば、インを拝する門とも考えられ、結局インはすなわち海ということになり、その海といってもはるか彼方ニライ・カナイの存在する海を指しての語ではないかとの疑いが起こる。もしそうだとするならばイン神ノロはニライ神の化身と解されるから、まことに都合がよい。また、子供は海の神から授かるとの信仰があったことによって、出産児と関係する産ガーがインガーと呼称されていることについても都合がよくなる。

それだけにとどまらず、宮古の犬の子の子孫というのも、海のはるか彼方から来た外来者の子孫と解され、赤犬子も海から来た優れた人ということになる。それに久高島のインニヤーが竜宮神の祭祀場（現在、宮が建立されている）となっていることも了解できる。

ここで、琉球における「海」の方言分布図を、次頁に掲げる⁽⁹⁾。

平良（2010：286-289）では、「すべての奥武島は、低潮時ともなれば、ほとんど干上がってしまう『しおひがた』の内に位置しているのである」とする。陸地から少し離れている慶良間の奥武島も、環礁内のイノーと呼ばれる潟の海に位置しているという。琉球のミセゼルは、潮干潟にある浅海を「アフ（オウ）ノウミ、オクノヒタ」と唄った。したがって、奥武島とは「アフ（オウ）の海の島、オクのヒタの島」の意である、と結論づけている⁽¹⁰⁾。

さらに、「万葉集」では「飫宇（おう）の海」と使われ、浅海と見られ、琉球の「あふの海」、転じて「オオノ海」は、古代日本における「をふ（おふ）の海」に発した語であるとしてもよいのではないだろうか、と指摘している。

分布語

ウミ系

①ウミー ?umi:

②ウーミ ?u:mi

③ウーミー ?u:mi:

④ウミ ?umi

⑤ウミィ ?umi

■ウム um

□ウニ ?uni

■ウン ?un

☆ンミ mmi

イン系

①イム im

②イー ン in

③イン in

①インナー inna:

②イナー ina:

▲ンナガ nnaga

▲イナガ inaga

トゥマリ系

■トゥマル tumar

■トゥモーリィ tumo:ri

■トゥモール tumo:ru

■トゥモラ tumo:ra

イソナ系

▲ッスフナ ssuṇa

▲スナカ sunaka

関連語

・アサイム asaïm 浅い海(宮)

・アマン aman やどかり(宮)

・イムドゥス imdu'i 海鳥(宮)

・イムヌスク imnusuku 海底(宮)

・イムヌムヌ imnumunu 海の物(宮)

・インブシ ?imbuʃi 夜光虫(奄)

・ウミガーミ ?umiga:mi 海亀(奄・沖)

・ウミカジ ?umikadʒi 海風(奄・沖)

・ウミザイ ?umidzai 海の小蝦(奄)

・ウミヌスクヌヅ ?uminusukunuʔju

深海魚(奄)

・ウミバタ ?umibata 海辺(奄・沖)

・ウミハブ ?umihabu 海蛇(奄)

・ウミンチュウ ?umintʃu: 漁師(奄・沖)

・ガキ gaki 牡蠣(奄)

・キグリ kiguri あさり(奄)

・シヌヌ sīnu'i 水雲(宮)

・シューワタイ ʃu:watai 海の歩いて渡れる所(奄・沖)

・スームティ su:mti 満潮(宮)

・ナン nan 波(宮)

・ピシ piʃi 浅瀬(宮)

・フウカイム fukaim 深い海(宮)

・フウカカム fukakam 深い(宮)

おもろさうし

・うみ(海)

・たきや(海)

・たにる, たりろ, たりる 海の彼方の理想郷

・にるや, みるや 海の彼方の理想郷

・へたとの(海殿)

・へたなます(海贈)

混効験集

・おくとう 大海なり

・せと 浪のうちあふ所也

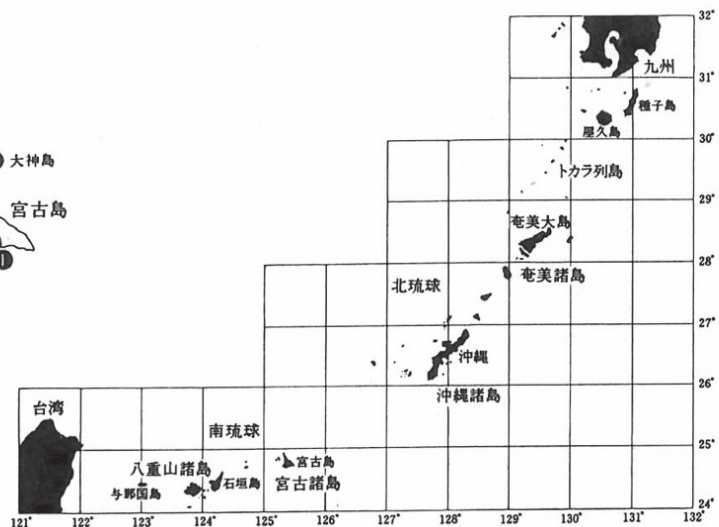


図1 琉球諸島における「海」の方言分布 (中本 1981: 255 による)

筆者は、この万葉集で「飫宇の海の河原の千鳥汝が鳴けば我が佐保川の思ほゆらくに」(万 3-371)と歌われた「飫宇の海」(をふの海)と通じる「あふの海」の逆語序である「海のあふ」の「の」を省略した「海あふ」こそが、イノーの語源ではないかと考える⁽¹¹⁾。

これまでの見解から、筆者は「イノー」の語源を、次のように解釈する。

海 あふ

イノー

ɸin-a Φ u > ɸina Φ u > ɸinau > ɸino: > ɸino:

ミセゼル(神の御言葉)で、潮干潟にある浅海を「アフ(オウ)ノウミ、オクノヒタ」と唄った、「アフ(オウ)の海、オクのヒタ」は、沖のヘタ(辺端=岸辺)であり、その中間にあるイノーは、まさにあの世とこの世の間の空間(中間)を意味するものであったと言える。この「イノー」と対語の「オクノヒタ」は、沖のヘタ(辺端=岸辺)であると同時に、リーフ(干瀬)を表すものと考えられる⁽¹²⁾。

その証左となるのが、渡久(2015:13-140)に挙げられている南島歌謡である。渡久地氏は、「奄美・沖縄のサンゴ礁は、《ヒシ》とよばれる礁嶺または前方礁原(reef crest)と、その内側に広がり干潮時にも海水を湛えた《イノー》(浅礁湖 shallow lagoon または礁池 moat)から構成される。角川書店刊『南島歌謡大成』(全5巻)をひもとくと、《ヒシ》と《イノー》を詠んだ歌謡が少なくない」とし、次の恩納間切(現・恩納村)の「六月御祭」のウムイを紹介している(外間・玉城 1980:380-381)。

原歌

訳

にらいやわいもの

ニライ親物

かないやわいもの

カナヤ親物

しぶくだら

(未詳語)

やいくだあら

(未詳語)

えのなげえん

イノー沿いに

ひしなげえん

干瀬沿いに

ついでたばうれ

着けてください

イノーを表す「えの」と干瀬を表す「ひし」が対語となって出てくる。

さらに、渡久地(2015:141)において、『おもろさうし』巻十一(650番)に収録されている次の歌を紹介している(外間 2000:433-434)。

一 こまかの霽に

おれ 見物

又 久高の霽に

又 ざん網 結び降ろちへ

又 亀網 結び降ろちへ

又 ざん 百 込めて

又 亀 百 込めて

又 ざん 百 捕りやり

又 亀 百 捕りやり

又 沖 膾 せゝと

又 辺端 膾 せゝと

又 手楫 選で 乗せて

又 沖 走い 立ての 競いて

又 干瀬 走い 立ての 競いて

柳田(1936)や折口(1952)では、人間の運命や他界概念、魂はどこに行くのかについて、深い考察が

なされている。

従来の民俗学者たちが持つ常世のイメージが、例えばイザナギが黄泉比良坂から見た時のように暗い闇であるが、谷川（2012：213）では、「琉球の他界観から見える南島の冥府は明るい」と唱えた。

人間の世界と神＝祖霊＝死者の世界がたえず往復しているという思想が、南島人の死生観のもっとも根本にあり、「現世の苦しみを来世までひきずるというペシミスティックなものではなく、むしろ祖霊＝神の温かい眼差しの下に生きてゆく力を与えるもので、けっして暗いはずはない」と記している。

南島では死者たちは干瀬の彼方で生の苦患から開放され、しばし休息した後に、やがてこの世に再生すると考えられていた。干瀬と呼ばれるサンゴ礁によって彼方と此方は二分されている。干瀬の彼方は青黒い波がうねる外海であるが、此方はイノーと呼ばれる碧玉色の遠浅である。旧暦の3月に宮古島の八重干瀬では大きく潮が引き、島ほども広い礁が幻のように出現して海の幸が手づかみできる。神から与えられた豊穡の海が、そこにあるのである。

外間（2000：433）では、「こまかび降ろして、ザンを百、亀を百も追い込めて、ザンを百、亀を百も捕って、沖脰、辺端脰にしようと、漕ぎ手たちを選んで乗せて、沖走い立て、干瀬走い立てが競って進む様の見事さよ」と解釈している。

ここで、注目されるのが、「沖」と「辺端」、「沖」と「干瀬」が対語になっている点である。筆者の解釈どおり、先の例と併せて考えるならば、「アフの海」は「イノー」を表し、「沖の辺端」（オクノヘタ）は、「干瀬」すなわち「ヒシ」を表すことになる。平良氏の述べるような、「アフの海」と「オクのヒタ（干潟）」とが「浅海」を表す解釈とは異なる。したがって、「アフ」と「オク」を同義語と見なす解釈するわけにはいかない。

喜山（2015：254-255）の中で、「イノー」の位置づけについて、次のように述べている。

（略）干潮から満潮にかけての間は、礁池は海に浸されますが、浅瀬が続くので人の活動を妨げることはなく、外海とは明らかに区別されています。ところが満潮になると、珊瑚礁は海に覆われて、島は直接、海に対することになります。このように、「珊瑚礁」はときに島であり、ときに海であることによって、「島」である顔も、「海」である顔も、両方合わせ持つ不思議な存在です。

ところで、この珊瑚礁の表情の変化は、島人の境界認識を揺さぶらずにはおかなかったでしょう。島人には、海の彼方をニライ・カナイというだけではなく、珊瑚礁の外の世界や海底を「あの世」と捉える感覚もあるので、潮が満ちてくるのは、「あの世」が押し寄せてくるように感じられるでしょう。そのうえ満潮になると、珊瑚礁は見えなくなり外の世界と一体化してしまいます。このとき、珊瑚礁が拡張された境界だとするならば、珊瑚礁が見えなくなることは、境界が塞がることとして見立てられたのではないのでしょうか。そして潮が引くと、「あの世」が遠ざかるみたいに、礁池は人の生きた活動を許容して海の幸をもたらしてくれます。けれどそこは、外の世界にもつうじています。それはつまり、満潮のときに閉じられた「この世」と「あの世」の境界が、引き潮とともに再び開かれるように見えることになります。このとき、きつとリーフの珊瑚の割れ目であるクチがその出入り口として見立てられるでしょう。

喜山氏は、「境界」という用語を用いるが、「イノー」のような一定の空間を表す用語としては「境域」の方が適当と考える。以下、「境界」を「境域」として解釈する。

すなわち、「この世」と「あの世」の境域が、「イノー」であるという位置づけをされている。これは、

筆者の意見と一致するところである。しかし、珊瑚礁が拡張された境界と解釈されていることには賛同できない。境界は、むしろイノーの方で、海の幸をもたらしてくれる源が珊瑚礁である。そこで、筆者は、喜山（2015：257）氏が「珊瑚礁の思考」として掲げた、満潮時と満潮時以外の「島」と「海」と「珊瑚礁」の位置図のうち「珊瑚礁」を「イノー」に改変した図を以下に示したい。

喜山（2015：256-257）では、また、ニライ・カナイの他界観との関連性を、次のように指摘している。

そして、「この世」と「あの世」の境域が開かれているとき、満ち潮に野っ、豊穡の印である魚たちがやってくるように、ニライ・カナイは死者の住む他界であると同時に、生命の根源である他界や異界でもあるというイメージは、珊瑚礁と海とのかかわりのなかでは自然に結びつくようになっていきます。こうしてみると、ニライ・カナイが、生と死の分離を完全には表現しないのも珊瑚礁があるからなのでしょう。

珊瑚礁こそは、島人を定着させました。そしてそれだけではなく、「まえびとコンプレックス」を形成するとともに、生と死は移行であり、「この世」と「あの世」は行き来できるという感覚を、生と死が分離の段階に入って以降も存続させることになりました。そこでは、生と死は分離し、境界は塞がれるけれど、また開かれるという特異な思考が生み出されました。この「珊瑚礁の思考」ともいうべきものが、文字を持たなかった島人からわたしたちへの最大の贈り物なのではないでしょうか。

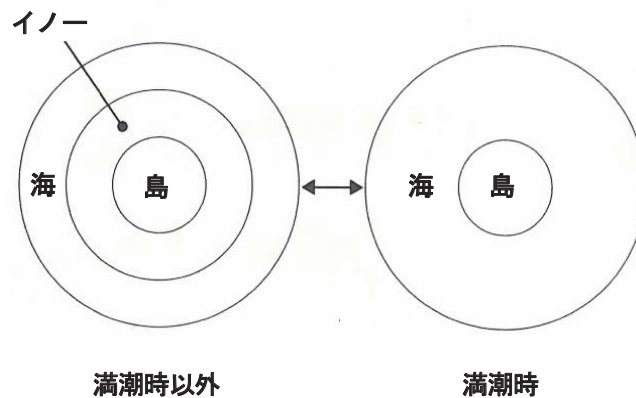


図2 イノーの思考（喜山 2015 を一部改変）

海に面した村には、海の彼方から訪れる神を迎え行事がある。琉球の人々は、海の彼方に神の住むニライ・カナイを想定する。そこから訪れる神は、「イノー」と「海」の境界⁽¹³⁾である「ヒシ」（リーフ）を越えてやってくるのである。

この「ヒシ」と「イノー」の関係について、谷川（1994：50）では、次のように述べている。

リーフは南島ではヒシ（干瀬）と呼ばれている。ヒシは潮が引けば姿を現し、潮が満ちると波間に没する暗礁である。ヒシの内側は浅い海でイノーと呼ばれている。そこは太陽が照ると青くかがやき、引き潮のときには海底の洲が現れ潮だまりができる。イノーは女や老人が魚や回を拾ったり海藻をとったりする日常生活の場である。それに対して、ヒシの彼方はどす黒い波がうねる外海である。舟が発達しなかった時代には、松材で作ったマルキブネでイノーの中を漕ぎまわるくらいが精一杯であり、外海に出ることはめったになかった。ヒシの外側は非日常空間であり、死んだ魂のおもむく他界であった。沖縄の海の特徴は日常空間と非日常空間、現世と他界とを一望に見渡せる点にある。

現世と他界の境界としての「イノー」は塞がるけれども、また開かれるという空間認識とその連続性は、まさに古代琉球の人々の思考であったのではないだろうか。つまり、現世（この世）と他界（あの世）の「中間の世界」を「イノー」の潮の満ち引きの世界に投影し、両者の連続性を感じ取っていたのではないだろうか。筆者は、「珊瑚礁の思考」は「イノーの思考」に書き換えられるべきものであると考える。そして、この「イノーの思考」は、琉球に広がる「青の世界」とつながっているのである。

4. おわりに

従来の説において、古代沖縄の色彩概念は、奄美諸島も同様で、「青の世界」とは、明るい世界に通ずる淡い世界で、『古事記』の黄の世界と類似しているとし、地先の奥武島は「青の島」であり、死後の世界の島と捉えられた。また、奥武の島は人が死ぬと死体を運んで葬った地先の小島であり、風葬墓に葬られた死者が黄色い世界に住むということから、奥武島を「青の島」と解釈し、「青」を他界の色として捉えられた。しかし、なぜそう捉えられるのか、具体的な根拠に基づくものではなく、説得性に欠けていた。

そこで比較言語学からのアプローチにより、「青」は、「中空」を指す語源のマライ・ポリネシア祖語 *awan に遡り、奈良朝の上代日本語では、アワ「淡」、アヲ「青」となった。近江の語源アハーうみ「淡海、相海」は、アワーうみが本来の語源であり、中空の色を反映している様を表しており、「淡海」の逆語序である「海淡」が、琉球弧で礁池を表す「イノー」の語源であることが分かった。それは、島と海の間、「あの世とこの世とのあいだ」を表す「境域」「中間の世界」でもある。この解釈は、「ニライ・カナイ」の他界観にもつながる。

これまでの考察の結果をまとめると、次のような図式が考えられる。

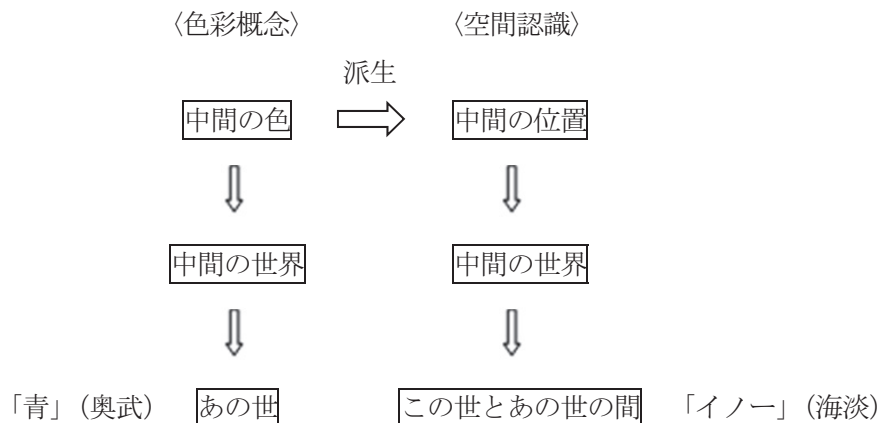


図3 色彩概念「青」と空間認識「イノー」との関係

「ニライ・カナイ」が、生と死の分離を完全には表現しないのも、礁池を表す「イノー」の存在があるからである。生と死は分離し、境域は塞がれるが、また開かれるという特異な思考が生み出された。

近くの地先に祖霊神の住む「青の島」があり、憧憬と畏怖の念をもって見守る生活が長く続いたと思われる。しかし、神の住む万物発祥の原郷を遠くへ投影する観念の動きが起こると、祖霊＝神の住む島は、「青の島」からはるか彼方のニライ・カナイへと移された。「青の島」が第一次的な他界であるとすれば、「ニライ・カナイ」は第二次的他界ということになる⁽¹⁴⁾。

【注】

- (1) 酒井(1987:181)では、あくまで後生である他界とニライ・カナイにつながる常世とは、別世界であると解釈している。
- (2) 宮城氏は、現在の名護市、旧羽地村にもこれと関連する風習があり、「同村に於ては4月^{あぶしばらい}畦 払」という稲の祭に神職がチャールマ島という小島に鼠や害虫を流すのである。これはおと奥武島に流していたのだが、そこに耕地が出来たからその付近のチャールマ島という更に小さい島に変更したものであろう」と述べている。
- (3) 引用文献では「ニライカナイ」となっているものと「ニライ・カナイ」となっているものがあるが、本稿においては「ニライ・カナイ」で通している。
- (4) 村山(1981:113)では、宮良(1980:15)『宮良當壯全集7』(初版『採訪南島語彙稿』(1926))において、「太陽」を表す奄美大島名瀬方言のティダクモガナシ、東方村古仁屋方言のティダクムガナシを紹介している。名瀬方言のティダクモガナシはティダ(太陽)クモン(天)カナシ(いとしい)という語序で、「いとしい天の太陽」という意味である。日本語のカナシ(キ)(いとしい)クモ(ン)(天)ティダ(太陽)の逆語序となっている。
- (5) 佐竹(1955)によると、古代は基本的に「赤」「白」「黒」「青」の四色という大きな枠組みで考えていたようである。そして、「赤」(明)と「青」(暗)、「白」(顕)と「黒」(漠)という対照をなしていたと分析している。
- (6) 村山・大林(1973:207)では、南島祖語 *avan 「天空」と日本語の awo 青(cf. ama- 天)、村山(1974:73)では、南島祖語 *avan 「空」と日本語アヲ awo とを比較しており、表記が統一されていない。
- (7) 崎山(2012:389)において、「『ハ行転呼音』の問題点と題して、「淡」の「アハ」と「アワ」との混同について、以下のように解説している。
- 橋本(1950)は、語中・語尾のハ行音がワ行音と同じになったのは奈良朝にすでにその痕跡がみられると言う。『名義抄』では「粟、淡、泡、沫」に対しすべてアハと書く。したがって、「粟、淡」の歴史的仮名遣いをアハ、「泡」をアワと断定することはできない。なお、『俚言集覧』(1797)は、アワ「淡」はアヲ「青」に通じ白色を表すというが、傾聴すべきである。同じゆれがアハ「阿波=粟」『万葉集』(14:3364)、アワ「禾=粟」『大智度論天安2年点』についてもみられる。したがって、「淡淡しく」をアハアハしく『宇津保物語』、「淡雪」をアハゆき『古今和歌集』と書くのもハイパーコレクションの例とみられる。国語辞書で「淡」の歴史的仮名遣いをアハと断定するのはアワしほ、アワに、アワの、などの用例を無視していると言わねばならない。
- したがって、「淡」につながる近江の語源「アハ海」は「アワ海」につながり、「アフ・アウ・アホ」「アヲ(青)」とつながると考えてよいことになる。
- (8) 徳之島の地名に「^{インジョーフタ}犬 門 蓋」がある。
- (9) 礁池を意味する「イノー」という語形を中心とする「イン系」の語は、主に南琉球に分布している。
- (10) 酒井氏は、「アフノウミ」と「オクノヒタ」を同義としているようであるが、対語であるので同義と解釈する必要はない。
- (11) 谷川(2010:143)において、「干瀬は外洋に面した沖縄の島々を、荒い風波から守る自然の防波堤である。その内側の海がイノーと呼ばれている。八重山ではイノーといえば砂をさす。宮良當壯氏は、イシナゴ(石の子)がイノーに転化した、とっている」とあるが、筆者は、宮良説の「イシナゴ」

から「イノー」への音変化は考えにくいと判断する。

- (12) 國學院大學デジタルミュージアム『万葉神事語辞典』によると、「沖つ国・奥つ国」の「奥」はオキ・オクと同根で、「遠く、深く、奥の方にある所をさす。沖の意。海、湖、川の岸から遠く離れたところをさす」とある。また、「沖つ国」は、「海の彼方にある死者の国。不老不死であることから常世の国ともいう」とある。
- (13) 「イノー」と「海」のリーフ（環礁）による境を意味するので、この場合は「境界」とする。
- (14) 谷川（1991：428）の見解に同じ。谷川氏は、「第二次的他界が強力になり、第一次的他界がうすれたのちも、かつての神聖な島としての青の存在は残った。ということから、ニライ・カナイの神はいったん「青の島」（奥武島）に足をとどめてから、本土に上陸するという風習が見られた」と述べている。

【引用・参考文献】

- 折口信夫（1952）「民族史観における他界概念」『古典の新研究 第1輯』岩波書店
- 喜山莊一（2015）『珊瑚礁の思考－琉球弧から太平洋へ－』藤原書店
- 酒井卯作（1987）『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房
- 崎山 理（2012）「日本語の混合的特徴－オーストロネシア祖語から古代日本語へ音法則と意味変化－」『国立民族学博物館研究報告』第36巻第3号：353-393
- 佐竹昭広（1955）「古代日本語に於ける色名の性格」『国語国文』24巻6号：352-370
- 平良恵貴（2010）『琉球の地名と神名の謎を解く』アント出版
- 谷川健一（1991）『南島文学発生論－呪謡の世界－』思潮社
- 谷川健一（1994）『海神の贈物 [民俗の思想]』小学館
- 谷川健一（1997）『日本の地名』岩波新書
- 谷川健一（2010）『列島縦断 地名逍遥』富山房インターナショナル
- 谷川健一（2012）『日本人の魂のゆくえ－古代日本と琉球の死生観－』富山房インターナショナル
- 田畑英勝（1976）『奄美の民俗』法政大学出版局
- 筒井 功（2015）『「青」の民俗学－地名と葬制－』河出書房新社
- 渡久地 健（2015）「南島歌謡に謡われた珊瑚礁の地形と海洋生物－「ペンガントウレー節」にかんする生態地理学ノート－」『人間科学 = Human Science (32)』：137-160
- 仲原善忠・外間守善編（1965）『校本おもろさうし』角川書店
- 仲松弥秀（1990）『神と村』梶社
- 仲松弥秀（1993）『うるまの島の古層－琉球弧の村と民俗』梶社
- 中本正智（1981）『図説琉球語辞典』力富書房金鶏社
- 橋尾直和（2008）「琉球語の接触言語的要素に関する考察」『日本語の探求－限りなきことばの知恵－（村山七郎先生生誕百年記念論文集）』北斗書房：237-244
- 橋本進吉（1950）「波行子音の變遷について」『國語音韻の研究（橋本進吉博士著作集4）』：29-45
- 外間守善（1981）「おもろ語あふの考察」『日本語の世界9 沖縄の言葉』中央公論社
- 外間守善（2000）『おもろさうし（上）』岩波文庫
- 外間守善・玉城政美（1980）『南島歌謡大成 I 沖縄編・上』角川書店
- 宮城真治（1972）『古代の沖縄』新星図書出版
- 宮城真治（1992）『沖縄地名考』名護市教育委員会

宮良當壯（1926）『採訪南島語彙稿』（『宮良當壯全集 7』1980）第一書房

村山七郎（1974）『日本語の研究方法』弘文堂

村山七郎（1975）『国語学の限界』弘文堂

村山七郎（1981）『琉球語の秘密』筑摩書房

村山七郎・大林太良（1973）『日本語の起源』弘文堂

柳田国男（1936）『先祖の話』岩波文庫

【引用・参考 URL】

<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>（國學院大學デジタルミュージアム『万葉神事語辞典』「おきつくに
沖つくに・奥つ国」の項